



卓 話



「若き日のケネディ大統領」

城西国際大学人文学部教授
土田 宏氏

アメリカの第35代大統領ジョン・F・ケネディは時代を大きく変えたと言われる就任演説と在任中の暗殺という衝撃的な死によって、いまなお多くの人たちの記憶に残っている。政治的業績と呼べるものを残している訳ではないが、アメリカでは「偉大な大統領」としての評価も高い。



一つの時代を築いた政治家であったことは確かだが、若い頃のJFKはそれほど存在感のある子供（青年）ではなかった。学業の成績も決して優秀ではなかった。むしろ、国語や数学という主要科目を苦手とする自信のない、目立たない子供だった。ある意味では「劣等生」だった。

その考えられる原因は「家庭」だった。

これまでケネディが育った家庭環境は理想的と述べられることが多かった。裕福で、敬虔なカトリックの家庭、4男5女という優秀で、活発な兄弟姉妹たち……。欠点を見つけるのが困難な理想的家庭だとされてきた。

しかし、この家族には父親が定めた重要な規則があった。それは勝つことだけが意味があるという価値観とそのために奨励された家族内の競争だった。

長男と2歳差で生まれた次男であったジョンにとって、この規則は厳しく辛いものだった。健康で、運動能力に優れ、しかも学業も優秀という父親がその将来に「大統領」を夢見たとしても当然の兄がいた。こんな兄に「勝てる」はずはなかった。2歳の差は挑戦に向かう競争意識を弟に植え付けるにはちょうどよい年齢差であった。しかし、どんなに挑戦しても弟が勝てるはずのない絶対的な年齢差でもあった。

勝つことが求められている家庭で、絶対に勝てない存在として甘んじなければならなかったのが次男ジョンだった。当然、自分に自信など持てるはずも

なかった。

また、冷たい母親がいた。母親ローズは自伝を含め、多くの著作では「賢母」として描かれていた。しかし、ジョンの嫁としてローズに接したジャクリーンが指摘していたように、彼女がジョンに「愛情」を注ぐことはなかった。浮気性の亭主を引き留めるのは子供を産むことと悟っていた彼女は多くの子を授かった。しかし、子供は愛情の対象ではなく、家庭という体裁を保つ道具であり、ある意味では子煩悩の亭主を引き留める手段だった。三番目の子供である長女が脳障害を持って生まれた段階で、彼女には子供はどうでもよくなっていた。子育ては乳母の仕事だった。

父親が将来に期待をかける長男には問題はなかったのだろうが、次男のジョンが家庭内に自分の存在感を得るには母親の愛情が必要だった。それを得られなかった彼は、当然のように「身体の変調」で母親の愛情を勝ち取ろうとした。原因不明の体調悪化の繰り返し……。

多くの本はジョン・F・ケネディは病弱な少年だった、のひと言で片づけてきた。しかし、明確に理由の分かる病気よりも、彼の場合は頻繁に原因不明の熱を出すことが多かった。精神的な原因からの発熱としか考えられず、結局は母親の愛情不足から来るものだったのだ。当然、学校の勉強はおろそかになり、そして学校での悪戯っ子という存在にとり下がってしまった。当然のように学校を変えることにもなった。そんなジョンは父親に認められることで立ち直っていった。

学校の問題児の父親として呼び出された父親が自分を叱らず、むしろ無意味な校則を笑ったことがジョン少年に大きな救いとなったのだろう。父親が彼を駐英大使に任命することになるルーズヴェルトと関係を持つ頃のことだった。尊敬する父親への愛情は、父親と同じくナチ・ドイツを支持することにもなったし大使としての父の下で働くことにもなった。

しかし、長ずるに従って次第に自立心が強くなっていった。家族からの離反によって自己主張を始めるようになった。大学の卒業論文ではついにドイツを見限り、「英国はなぜ眠ったか」と対ナチ宥和策のチェンバレンを批判し、同時に父親と決別した。

十分な健康体でもないのに海軍に志願し、そして「南太平洋の英雄」の名誉を得た。優秀だった兄は特務作戦で戦死した。勝てなかった兄がいなくなったことと英雄としてその兄に「勝てた」ことは、彼が自信を得るのに十分だった。

そんなジョンが自分で大統領を目指す気になったのはおそらくは1955年前後のこと。上院議員になって暫くしてからだったろう。当時、危篤にまで陥っ

た病室の中で、自分の人生を真剣に考えたとき、短いかも知れない人生を思い切り生き抜く決心をしたのだろう。その行き着く先が大統領だった。

戦場から戻ったとき、ジョンはジャーナリストとして生活し始めた。子供の頃は歴史学者を夢にみていた。20代後半になっても彼はまだ人生を見つけられないでいた。兄、父母という束縛から離れたとき、彼はたくましく自分の生きる道を進み出したのだった。